

(旧)雲雀ヶ丘駅



距離がわずか
500mだった

(旧)花屋敷駅

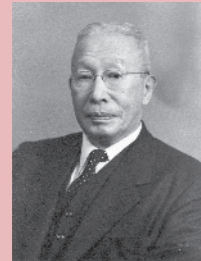


1910年(明治43年)、箕面有馬電気軌道開通と同時に開業。現在の雲雀丘踏切の西側。

1916年(昭和5年)、旧花屋敷駅の西約500mに阿部荘園開発時に開業。右の建物はビリヤード台のある待合所。



現在の雲雀丘花屋敷駅
両駅が近く、8両の編成増に対応するため昭和36年に合併。駅名はジャンケンで決められた。



鳥井 信治郎氏



雲雀ヶ丘学園 昭和24年創立時

雲雀ヶ丘学園の創立
当時は池田に公立の学校がありませんが、遠かったため住民が私設で財団法人雲雀ヶ丘学園(初代理事長・鳥井信治郎、校長・小谷新太郎)を作りました。男女共学1学年20名程度で米人の英語教育も行っていました。当時の行政の管轄は西谷村役場で出張所が設けられていました。



雲雀ヶ丘学園 現在

雲雀丘阿部荘園

阿部元太郎の開発

この地域は傾斜地に住宅開発が行われていたが元々日本では住宅は平野部に開発しており、当時は重機もなかった為に傾斜地は開発には不適切で人など住まない場所とされてきた。ところが神戸には外国人が住む場所として居留地がありました。その人たちが山の中に別荘地として住宅を作りはじめましたが阿部元太郎氏はこの開発を手掛けていました。
当時、雲雀丘地域は山林であり安価に広大な土地を取得できました。阿部元太郎氏は「私地公景」という自分の地ではあっても公の立場でまちの形成を考えていく理想主義に基づき、大正11年日本住宅株式会社を設立、社長となり、約15万坪の住宅開発を行いました。

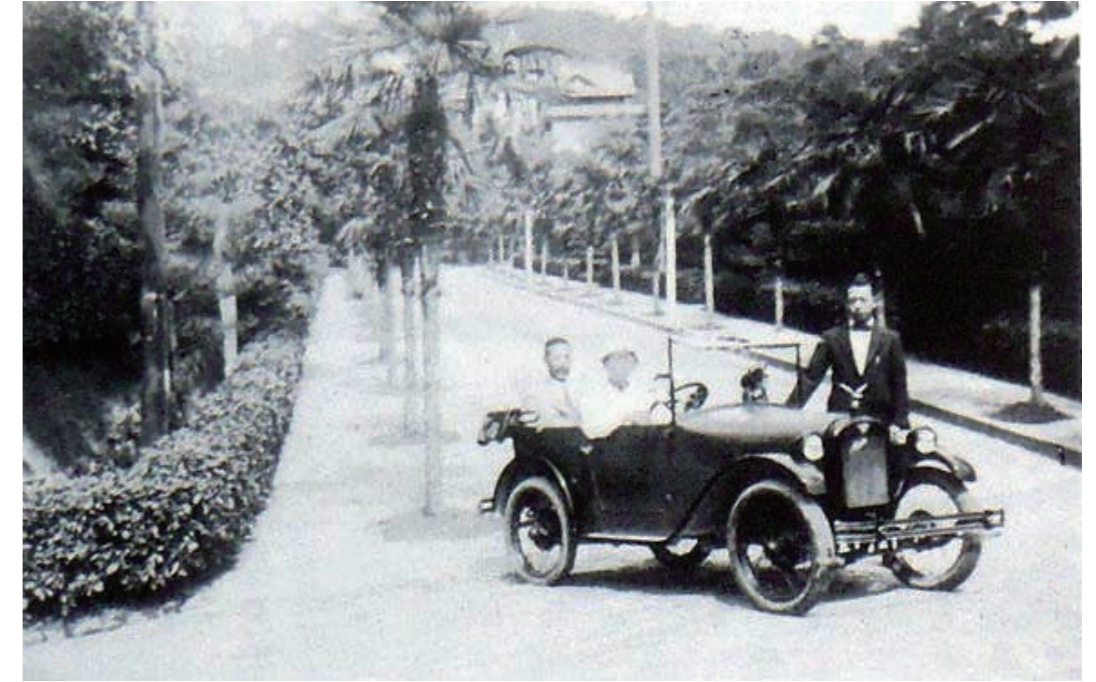
当時としては珍しく、滝ノ谷川を水源とする水道と浄化槽方式で上下水道を完備していました。また電気は阪急から供給を受け駅近くに大阪ガス(片岡直方)から指導をうけ、ガス発生炉も設置していました。



阿部元太郎

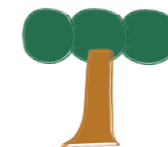
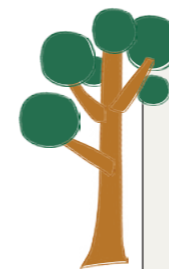
阿部元太郎氏
大正初期に武庫郡住吉村で日本初の住宅開発を行い、大正4年には雲雀丘周辺の開発を行う。

写真のT型フォードの後ろに座っているのが阿部元太郎氏。駅前にはシユロ口並木を設置、道路幅を自動車通行ができるように拡張。



「私地公景」とは

「木を植える土地は自分のものであっても、その景観は公のものである」という考え方。現在も戸々の緑をまちの緑という理念を大切に自然と調和したまちづくりをしています。



現在の雲雀丘花屋敷駅前

山林精常園



現在の生成幼稚園から北を望む景色



東精常園全景（昭和12年頃）山林精常園の開発中の写真。木造の住宅地が作られた。大きな建物は病院の施設、学校など。



精常林間講堂（建て替え前の生成幼稚園）



現在の生成幼稚園

療養施設の開発

これは住宅地の開発ではなく医師・別所彰善の「人間医学」の実践場所として開発されました。大正末期に「山林精常園」を計画しました。昭和2年8月花屋敷に10万坪の土地を入手（現雲雀丘山手二丁目の一部、二丁目全部）しています。療養施設として開発しており本館は「精常興生院」で、入院や保養病棟寮と図書館等を設置しました。

8000坪に200区画の会員住宅地を設置し昭和10年頃には約100名が生活をするようになりました。上水道は井戸を利用し、電気は自家発電で山林の中で自然に即した開発を行っていました。



別所彰善氏
（山林精常園創設者）



※主要参考文献

- 宝塚市編『宝塚市史』第3巻 1977年
- 阪急電鉄株式会社『最も有望なる電車』1979年
- 甲田拓「宝塚市雲雀丘地区の住宅開発に関する史的研究」
- 1997年中嶋節子「近代における宝塚市雲雀丘住宅地の開発経緯とその性格—阿部元太郎による開発を中心に—」
- 『大阪市立大学生活科学部紀要』第46巻 1998年『阪神間モダニズム』
- 1997年 淡文社 宝塚雲雀丘・花屋敷物語編集委員会『宝塚雲雀丘・花屋敷物語』2000年『摂北温泉誌』
- 『宝塚温泉 / 写真の中の明治・大正』

花屋敷住宅地・新花屋敷地区の開発



花屋敷住宅地

花屋敷住宅地の開発

大正6年に花屋敷土地株式会社（社長・河崎助太郎、常務・大島実太郎）が開発した地域です。開発にあたり道路の両側に櫻並木が作られており花屋敷という名前もそこから来ていると言われています。106区画9万坪の開発が行われました。敷地には桃園温泉（株）を設置していました。ここには銭屋五兵衛の石碑もありました。銭屋五兵衛は石川県の廻船問屋で財をなされた方でこの縁故のかたがこの地に石碑を作られています。水道は「花屋敷自治会水道」を使っています。行政は雲雀丘と同様に西谷村が管轄していました。



トロリーバス運行ルートの現在の風景



駅から温泉をつなぐトロリーバス（無軌条電車）を敷設



田中数之助氏



新花屋敷温泉パンフレット

「能勢口停留場より十二町、花屋敷停留場より約十町、雲雀丘 停留場より約六町にして達する丘阜にして、花屋敷、雲雀丘両住宅会社経営地に接し、また大阪の富豪藤田男の別荘に接す。面積約六十万坪、・・・」と記述。

新花屋敷温泉とトロリーバス

田中数之助は大坂心齋橋で久留米がすりの販売で財をなし、事業拡大で不動産業に進出しました。大正8年に能勢口土地株式会社（社長田中数之助）が設立しましたが同9年新花屋敷温泉土地株式会社に改称し、住宅開発を開始と満願寺南西に遊園地・娯楽施設を付属した温泉場を開設しました。駅から距離があるために馬車や自動車を使って利用客の送迎を行っていました。輸送効率を上げるためにトロリーバス（無軌条電車）を敷設しました。

トロリーバスの電源は阪急より供給しました。事業としては赤字が累積し昭和7年にトロリーバス事業から撤退し同年に廃業となります。花屋敷から温泉地までトロリーバスが敷設され隣接する土地を住宅地として手掛けた大きな事業でした。

④ 日下家住宅表門・中門・東門
(2019年)



⑤ 石田家住宅主家・屋敷門
(2019年)



雲雀丘・花屋敷地域の国登録有形文化財

① 正司家住宅洋館・和館
(2005年)



洋館、和館併存住宅。建物とマッチした高低差のある敷地には季節ごとに回遊式庭園を楽しむことができます。また、スタインウェイ、ヤマハのピアノのある音楽サロンもあり、貸サロンもしています。ホームコンサートやサロンコンサートにご使用できます。



正司邸：旧宝塚ホテルを手がけた阪神間モダニズムを代表する古塚正治の設計。NHK朝ドラ「ふたりっ子」やドラマ「トイレの神様」の舞台にもなりました。

⑥ 旧高碕家住宅
(2019年)

現在は「高碕記念館」として公開されています。有名な建築家であるウィリアム・ヴォーリズの設計。コロニアル風の白亜の洋館です。



正司家住宅洋館



正司家住宅和館

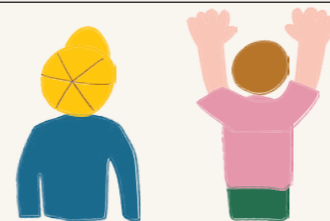
おわりに

このように土地の開発が行われ、日本でもかなり最初の、有名な洋風建築や高級住宅地が造られたということをぜひ知っていただきたい。そしてこの地域を大切に、残して欲しい気持ちはあるが造られた土地所有権の関係でどうなるかわからない、取り壊されてしまうものがあるかもしれません。

雲雀丘は役所が手助けをもらう前に、民間の中で役割をなしていたり自分の土地だけでなく、公的な施設に対する認識の高さがあります。今後この美しい景観を残していただくためにはどうしたらいいか、公私一体となって街づくりを進めていってほしいと思います。

国登録有形文化財とは

重要文化財よりゆるやかな制限で文化財の保護や活用ができる。登録された建造物は宿泊施設を付加して観光資源にしたり、修繕や改築の自由度が高く、幅広い活用を考えられるのが何よりの特徴である。



② 高添家住宅洋館・和館・土蔵・木戸門
(2016年)



③ 栗原家住宅主家
(2019年)

